暗夜の格闘

小酒井不木

白金塊(はっきんかい)の紛失

紅色ダイヤ事件の犯人は、意外にも塚原俊夫君の叔父さんでしたから、悪漢の捕縛を希望しておられた読者諸君は、あるいは失望されたかもしれませんが、これから私のお話しするのは、先年来、東京市内の各所を荒らしまわった貴金属盗賊団を俊夫君の探偵力によって見事に一網打尽にした事件です。

十月のある真夜中のことです。正確に言えば午前二時頃ですから、むしろ早い朝といった方がよいかもしれません。一寝入りした私は、はげしく私たちの事務

室兼実験室の扉（ドア）を叩く音に眼をさましました。

「俊夫さん、俊夫さん」

と女の声で、しきりに俊夫君を呼んでいます。私が、

「俊夫君」

と言って、隣の寝台（ベッド）に寝ている俊夫君を起こすと、

「知っているよ、ありゃ木村のおばさんの声だ」

と言って俊夫君は大急ぎで洋服を着て、扉を開けにゆきました。

木村のおばさんというのは、親戚ではありませんが、俊夫君の家（うち）から一町ばかり隔たった所に小さい貴金属品製造工場を持っている木村英吉という人の奥さんで、

俊夫君がよく遊びにゆきますから、きわめて親しい間柄なのです。

「俊夫さん、大変です。たった今うちへ泥棒が入って、大切な白金(はっきん)の塊(かたまり)をとってゆきました。早く来てください」

とおばさんは顔色を変えて申しました。

「どこで盗まれたのですか？」

「工場です」

「まあ、心を落ちつけて話してください。その間に仕度(したく)しますから」

と言って俊夫君は、例の探偵鞄の中のものを検(しら)べに

かかりました。

おばさんが息をはずませながら話しましたところによると、昨日(きのう)津村伯爵家から使いが来て、伯爵家に代々伝わる白金の塊を明後日(あさって)の朝までに腕輪にして彫刻を施してくれと頼んでいったそうです。

この白金の塊はこれまで度々盗賊たちにねらわれたものであるから、じゅうぶん注意してくれとのことで、おばさんのご主人の木村さんは、助手の竹内という人と二人で十二時まで仕事をし、それから竹内さんだけが徹夜するつもりで仕上げを急いでおりました。

ところが、木村さんが寝床(ねどこ)へ入って、うとうととし

たかと思うと、何か工場の方から異様な物音がしてきたので、早速とび起きて、工場の扉をあけて見ると、中は真っ暗であったが、妙な鼻をつくような甘酸（あまず）いような臭いがしたので、はっと思って電灯をつけると、驚いたことに助手の竹内さんは細工台のもとに気絶して倒れ、白金の塊が見えなくなっていたそうです。

「すぐ警察へ電話をかけようと思ったのですけれど、夜分のことではあるし、それに、俊夫さんの方が警察の人よりも早く犯人を見つけてくれるだろうと思ったので、お願いにきたんですよ」

とおばさんは俊夫君の顔をのぞきこむようにして申

した。
「おばさん心配しなくてもいいよ。白金の塊はきっと僕が取りかえしてあげるから」
十分の後、私たちは木村さんのお宅につきました。助手の竹内さんは、その時もう意識を回復して、平気で口がきけるようになっておりました。
竹内さんの話によりますと、木村さんが工場を去られてから四十分ほど過ぎた頃、突然、外から誰かが硝子（ガラス）を割ったので、驚いて顔をあげると、割れ口からいやな臭いのする冷たい風がヒューッと吹いてきて、そのまま覚えがなくなってしまい、木村さんに介抱さ

れて正気づき、初めて白金の塊のなくなったことを知ったというのです。

　俊夫君はこの竹内という人を、虫が好かぬと見えて、これまで、よく私に「いやな奴だ」と申しておりましたが、今、竹内さんの話を聞きながらも、俊夫君は、時々睨（にら）むような目付きをして眺めましたから、私は俊夫君が竹内さんに嫌疑をかけているのでないかと思いました。

　竹内さんの話を聞いてから、俊夫君は木村さんについて工場へ行きました。いやな臭いがプンとしてきました。工場は居間の隣にあって、居間よりも一尺ばか

り低く、タタキ床で、三方が壁に取りまかれた八畳敷位の大きさの室でして、居間とは扉で隔てられております。窓は北側にあって二枚の硝子戸がはめられ、その外側には鉄格子がつけられてあります。そして窓から二尺ばかり離れて細工台が置かれ、その上には色々の瓶や細工道具がぎっしり置きならべられ、なお三方の壁には棚がつけてあって、その上にも、色々の瓶や化学器械がいっぱい置きならべてありました。

俊夫君は探偵鞄の中から拡大鏡を出して、まず床の上を検べました。けれど、別に手掛かりになるような足跡などは一つもなかったと見えまして、やがて、窓

の中側に落ちている硝子片を熱心に検べ、硝子の割れ穴の大きさをはかりました。それから硝子戸をあけて格子を見ました。果たしてそのうちの二本が鑢（やすり）で切られ、左右へ折りまげてありました。

それから俊夫君は閾（しきい）を検べ、さらに、懐中電灯を取りだして、戸外を照らしました。地面には芝生がいっぱいかぶさっていまして、硝子の破片はその上にも落ちていました。俊夫君は、何思ったか、しばらくの間その破片をじっと見つめておりました。

「なかなか気のきいた泥棒だ」

と、俊夫君は嘲（あざけ）るように申しました。俊夫君がそ

ういう言い方をするときは、必ず反対の意味を持っております。すなわち「気の利いた泥棒」というのは、「間の抜けた泥棒」という意味にとって差し支えありません。

それから、俊夫君は細工台の上の物や、細工台についている引き出しの中のものをいちいち丁寧に検(しら)べました。次に棚の上のものも同様の熱心をもって検べ、箱らしいものはみな蓋を取って中を検べました。まるで白金が工場のどこかに隠されてでもあるかのように、いわば血眼(ちまなこ)になって捜しました。最後に西側の下の棚の上に、盆にのせた土瓶と茶碗とがあるのを見て、俊

夫君は木村さんに尋ねました。
「このお茶は誰が飲むのですか」
「私ですよ」
とこのとき工場へ入ってきた竹内さんが申しました。その口のきき方がいかにも俊夫君を馬鹿にしているような口調でして、私もいささか腹がたちました。
俊夫君は土瓶の蓋を取って見ました。
「竹内さんが飲むお茶だけに、中々うまそうな色をしている」
と、俊夫君も負けてはいません。ずいぶん皮肉な言い方をした。

工場の中の検査を終わった俊夫君は、居間へ来てから木村さんに申しました。

「工場の検査はこれですみましたよ」

「手掛かりはありましたか？」

と木村さんは俊夫君の顔をのぞきこんで尋ねました。

「まだ大事な検査が残っているから、それがすまなければ何とも言えません」

「それは何ですか」

「木村さんと竹内さんの身体検査です」

「え！　わたしらがとったと思うんですか」

「何とも思わぬけれど、検査には念に念を入れておかねばなりませんよ」

「だって、私が盗むわけもないし、竹内だってもう半年もいて、正直なことは保証付きの人間ですから、それはやられるまでもないでしょう」

俊夫君はむっとして言いました。

「身体検査がいやなら、僕はこの事件から手を引きます。警察の人にやってもらってください」

木村さんも、竹内さんも仕方なしに俊夫君に身体検査を受けました。ことに竹内さんは嫌な顔をしました。するとと俊夫君は意地悪くも、馬鹿丁寧に、竹内さんの

洋服のポケットをいちいち調べました。しかし白金の塊は木村さんからも竹内さんからも出てきはしませんでした。

「これで身体(からだ)の外側の検査が済んだから、今度は中側です」

「え？」

と言って木村さんはびっくりしました。

「中側の検査とはどういうことです？」

「白金の塊は細かにすれば飲むことができますよ。だから身体の中へ隠すことができるのです」

木村さんはあきれたような顔をしましたが、

「すると、腹をたち割って検（しら）べるのですか」

と冗談半分に言いました。

「木村のおじさん！」

と俊夫君は真面目な顔をして言いました。

「冗談はやめてもらいましょう。僕が身体（からだ）の中を見たいと思うのは、見なければならぬ理由があるからです。これから駿河台の岡島先生のところへ行って、二人の身体をエックス光線でみてもらいますから、すぐ自動車を用意してください」

俊夫君の言葉がいかにもハキハキしていたので、木村さんは何も言わずにおばさんを近所の自動車屋へ走

らせました。私は俊夫君の命令で岡島先生へ電話をかけました。まだ夜が明けぬ前でしたが、先生はいつ来てもよいと快く返事をしてくださいました。岡島先生は医学博士で、俊夫君が先生について医学を修めたときに我が子のように可愛がって教えてくださった人で、俊夫君のことなら、どんな難題でも聞いてくださるのです。だから、俊夫君は先生のご都合を聞かぬ先に自動車を用意させたのです。

　やがて自動車がきましたので、私たち四人は人通りの少ない黎明(れいめい)の街を駿河台さして走りました。四人はとかく黙りがちでしたが、中でも竹内さんはにが虫を

つぶしたような顔をしていました。

私は自動車にゆられながらいろいろ考えました。俊夫君が申しましたように、エックス光線にまでかけて検査するには、それだけの理由がなくてはなりません。すると木村さんか竹内さんかどちらか［＃「どちらか」は底本では「どちから」］一人が白金を飲んでいるかもしれません。私は早く岡島先生の検査の模様が見たいものと、自動車の走るのさえ、もどかしく感じました。

不思議なお茶

読者諸君、諸君はエックス光線で身体の内部を検査するところをご覧になったことがありますか。それを行うには検査台の上に人を立たせ、後ろからレントゲン線で照らし、前にシアン化白金バリウムの盤をあてて見るのです。

シアン化白金バリウムは、レントゲン線にあたると蛍光を発します。レントゲン線は衣服や筋肉は通過しやすいですが、金属や骨は通過しにくいですから、これらは影となって盤の上にあらわれるのです。ですからもし、木村さんか竹内さんが白金をのみこんでいたら、必ずその影が見えるはずです。

ところが、岡島先生が熱心に検査せられましても、白金らしい影は二人の身体に見えませんでした。
「俊夫君！　お二人とも飲んではおられないよ」
と先生は真面目な顔で申されました。
「どうも有り難うございました。それで安心です」
と俊夫君はさも安心したように、にこ、にこ、にこ、にこして答えました。私はすっかり予期がはずれたので、いささか失望を感ぜざるをえませんでした。それから俊夫君は、
「木村のおじさん、竹内さん、まことにご苦労様でした」
と身ごしらえをしている二人に向かって言いました。

木村さんは笑い顔をしていましたが、竹内さんは、それ見たことかと言わんばかりに、ムッとした顔をしていました。
「さあ、これで僕の捜索の方針が決まったから、これから大急ぎで、心当たりを検べに出かけます。自動車は借りてゆきますから、お二人は電車でお帰りください」
　こう言ったかと思うと、俊夫君は岡島先生に挨拶して、私を引きずるように手を取って、表へ連れだしました。
「兄さん、大急ぎだ。途中でパンを買って、それから

木村さんの家（うち）へ行くから運転手に全速力で走るように告げておくれ」

木村さんの家へ行くくらいなら、二人をいっしょに連れてくればよいのに、これもやっぱり、俊夫君の竹内さんに対する反感のためだと私は思いました。

淡路町の、いま起きたばかりの店でパンを買ってから、自動車で、人通りの少ない朝の街を快速力で走りました。俊夫君は、先方へばかり気がせいていると見えて、前かがみになって、ろくに口もききませんでした。私はとうとうたまりかねて、

「おい俊夫君！」

と呼びますと、はじめて我にかえったように私の方を向いて、ニコリ笑い、自動車のもたれによりかかりました。

「パンなど買ってどうするの？」

と私は尋ねました。

「木村のおばさんのところで朝飯を食うんだ」

「え！　朝飯を？」

「そうよ、おばさんのうちには、おいしいお茶があるよ。竹内さんさえ喜んで飲んでるじゃないか」

私は先刻、木村さんの細工場に、竹内さんの飲むお

茶の土瓶のあったことを思い出しました。
「僕もいっしょにご馳走になろうか？」
「いや、兄さんは先方へ着き次第、警視庁へお使いに行ってもらう」
「え？　警視庁？　では犯人の見当がついたのかい？」
「まだ何とも分からんさ。けれどもことによると大きな捕り物があるかもしれん」
と俊夫君は眼を輝かして申しました。
しばらくしてから私はまた尋ねました。
「君は先刻、エックス光線をかけにゆくにはそれだけ

の理由があると言ったが、あれは本気だったかい？」
「もちろんさ！」
「どんな理由？」
「それはいま言えない」
「だって二人とも白金を飲んではいなかったじゃないか？」
「そんなこと、初めから分かっていたよ」
「え？」
私はびっくりしました。二人が白金を飲んでいないことが分かっていたら、何のためにわざわざ岡島先生を煩わしたのであろうか。私はどう考えてみても了解

することができませんでした。
　程なく自動車は木村さんのところへ戻ってきました。物音を聞きつけたおばさんは、外へ走りだしてきました。
「俊夫さん、どうでした？」
　とおばさんは尋ねました。
「二人とも白金は飲んでおりません。僕は途中に用があったので先へ来ましたが、あとから二人は見えます」
　私たちは、自動車を待たせて家（うち）の中へ入りました。
「おばさん、竹内さんの下宿はどこでしょうか？」

「芝区新堀町一〇の加藤という八百屋の二階です」

「ちょっと、封筒を一枚恵んでください」

おばさんが封筒を持ってきてくれると、俊夫君は、鉛筆で手帳へ何やら走り書きをしましたが、それからその頁を破って封筒の中へ入れました。

「兄さん、これを警視庁の小田さんの所へ持っていってください。ゆうべはたしか宿直の番だったから、それから僕は事によると十時頃までは帰らぬかもしれぬが、うちで待っていてくれ」

私が立ちあがった時、俊夫君はおばさんに向かって言いました。

「おばさん、僕お腹がすいたから、買ってきたパンを工場で食べさせてもらいますよ。冷たいお茶はありませんか」
「あります。先刻、沸かしたのがもう冷めておりますよ」

警視庁には果たして小田刑事がおられました。小田さんは俊夫君とは大の仲よしで、俊夫君は小田さんのことを「Ｐのおじさん」と呼びます。Ｐは英語のPolice（警察）の最初の文字だそうです。「Ｐのおじさん」という綽名（あだな）は小田さんは嫌いだそうですが、これ

まで度々俊夫君に手伝ってもらって手柄をされたので、俊夫君の言うことはけっして怒りません。

小田さんすなわち「Ｐのおじさん」は、俊夫君の手紙と聞いてさっそく開いて見られましたが、その顔は急に輝きました。

「よろしい、万事こちらで取り計らうと、俊夫君に話してくれたまえ」

と言われました。

私一人、俊夫君の事務室兼実験室の中に寂しく待っていると、九時少し過ぎに木村さんが訪ねてきました。

木村さんは大切な白金の紛失のために気を弱らせたと見えて、いつもとは違ってすこぶる元気のない顔をしていました。

「大野さん、白金が明日の朝までに帰ってこぬと、私はどうしたらよいでしょうか」

と木村さんは私に向かって、いかにも心配そうな顔をして申しました。

「まあご心配なさいますな。俊夫君はきっと取りかえしてくれるでしょう」

「けれど俊夫さんは私や竹内ばかりにかまっていて、あんなエックス光線のようなむだ骨折りをさせたので

すから、あの間に犯人はもう遠い所へ高飛びしてしまったにちがいないです」
私は、どう言って木村さんを慰めてよいかに迷ってしまって、黙ったままじっと考えこみました。
するとそこへ俊夫君が額に汗をにじませて帰ってきました。
「木村のおじさん、よく来てくれました。先刻は失礼しました。竹内さんはどうしましたか」
「竹内はいっしょに帰ってきてから間もなく、疲れたから、下宿でしばらく眠ってくると言って帰りました」
「竹内さんは怒っていたでしょう？」

「だって俊夫さんはあんな大袈裟なことをするのですもの。私は生まれて初めてエックス光線にかけられましたよ」
「あんなものを度々かけてもらうのはよくありませんし」
と俊夫君は皮肉を言いました。
「で、俊夫さんはもう犯人の見当はついたのですか」
「つきましたよ」
「え？」
と私たち二人は顔を見合わせて同時に叫びました。
「犯人は誰です？」

と木村さんはいきまきました。
「まあそう、気を揉まんでもよろしい。それをお話しするまえに、おじさんに振る舞いたいお茶がある」
「お茶ですって？　お茶どころではないです。早く犯人の名を聞かせてください」
俊夫君はそれに返事もせずに、薬品棚から一つの罎（びん）を取り、それを傾けて、中の液をビーカーの中へ注ぎました。それから、細い白金線を小さく切って、木村さんの眼の前に持ってきました。
「木村のおじさん、このお茶はちょっと変わったもので、不思議な芸当をやります。いいですか、この中へ

これを入れますよ」
　こう言って俊夫君が白金線の小片を液体の中へ入れると、白金はかすかな音をたてて、見る間にとけてしまいました。
「王水（おうすい）（塩酸と硝酸との混合物）ですか？」
　と木村さんは驚いて申しました。
「そうです。けれど竹内さんの飲むお茶はこれです」
「え？　何？　ではあの竹内の土瓶の中は王水でしたか？　あの中へ白金がとかされていたんですか？　そりゃ大変！」
　こう叫んだかと思うと、木村さんは後をも見ずにあ

たふた駆けだしていきました。

「兄さん僕らも木村さんの家(うち)へ行こう」

私たちが木村さんの家の前までゆくと、木村さんは中から駆けだしてきました。

「俊夫さん、竹内は土瓶を持って帰ったそうです。早く何とかしてください！」

「おじさん、あわてなくてもよい、兄さん、自動車を呼んできてください」

と俊夫君は落ち着いて申しました。

化学実験室

私たち三人は、私の呼んできた自動車に乗って、芝区新堀町の竹内さん——私はこれから竹内と呼びます——の下宿へ急ぎました。小春日和（こはるびより）の暖かさに沿道の樹々の色も美しく輝いていましたが、木村さんは先へ心が急（せ）くと見えて、あまり口をききませんでした。

自動車が目的の場所へ着くと、木村さんは逃げだすように降りて、竹内の下宿している八百屋へとび込んでゆきました。私も続いて降りようとすると、俊夫君は私の腕をかたく摑んで言いました。

「兄さん降りるまでもないよ、竹内はもういない。い

まに木村のおじさんが、顔色を変えて戻ってくるから待っていなさい」

しばらくすると木村さんは果たして、真っ青な顔をして出てきました。

「俊夫さん、どうしよう。八百屋のお上(かみ)さんに聞くと、竹内は今朝(けさ)急に引越しをすると言って、行き先も言わずに、荷物を持って出ていったそうです」

「おじさん、まあ心配しなくてよい、竹内の行った先はちゃんと分っているから、白金は大丈夫とりかえせます。さあこれからこの自動車で警視庁へ行きましょう」

「警視庁？」

と木村さんは眼を丸くして言いました。

「そうです、ことによると竹内はもう捕まっているかもしれん」

木村さんの顔に、はじめて安心の色が浮かびました。

自動車が芝公園にさしかかったとき、木村さんは俊夫君に向かって尋ねました。

「俊夫さんは、どうして白金が土瓶の中の王水（おうすい）にとかしてあることを見つけたのですか？」

「ああ、そのことですか、それじゃこれから僕が探偵

した順序を話しましょう。まず工場の床の上には、外から入ったらしい人間の足跡が一つもありませんでした。

それから、あの硝子（ガラス）の破片（かけ）です。外から破ったのなら、中の方にたくさん破片がなくてはならぬのに、よく検（しら）べてみると、外の芝生の上に落ちていた破片の方が中に落ちていた破片より沢山あったのです。だから、あの硝子は中から破ったものだと知ったのです。

中から破ったものだとすれば、破ったものは竹内より他にありません。すると白金は竹内が盗んだにちがいないが、さて、一体どこに隠しただろうかと、僕は

一生懸命に引き出しをあけたり棚の上の器の中を検べました。
　ところがどこにも見当たらなくて、とうとういちばんしまいにまさかと思って土瓶の蓋をとったら、妙な香（におい）がぷんとしました。はっと思って僕は考えたのです。室（へや）の中の麻酔剤の臭いは、この土瓶の中の液体の臭いをまぎらすためだ。白金はこの土瓶の中に隠されてある。
　こう思ったけれど、あの場合それを言いだしたら竹内がどんなことをするかもしれぬ。そこで僕はおじさんに『誰の飲むお茶ですか』と聞きました。するとお

じさんより先に竹内が返事をしました。だから僕はいよいよ竹内が犯人だと知って、エックス光線をかけにいってもらったんです」

「え？」

と木村さんは不審そうな顔をして尋ねました。

「白金が土瓶の中にあったなら、エックス光線をかけるに及ばぬじゃないですか？」

「それはそうだけれど……おや、もう警視庁へ来ましたよ。そのことはあとでゆっくり話しましょう」

こう言ったかと思うと、俊夫君は自動車の扉(ドア)をあけて、さっさと出てゆきました。

警視庁には俊夫君がＰのおじさんと呼ぶ小田刑事がおられて、私たちをにこにこした顔で迎えてくださいました。俊夫君は小田さんと二人きりで、しばらくのあいだ何やらぼそぼそ話をしておりましたが、それがすむと、ちょうど昼飯（ひるめし）時だったので、私たちは小田さんといっしょにうどんのご馳走になりました。木村さんは相変わらずぼんやりしていましたが、俊夫君は快活にはしゃぎました。

食事がちょうど終わった時、小田刑事の部下の波多野さんが角袖（かくそで）でふうふう言って入ってこられましたが、

私たちの姿を見てちょっと躊躇されました。すると小田さんは、
「波多野君、この人たちは、みんな内輪だから、かまわず話してくれたまえ」
と言われました。
「仰せに従って新堀町の八百屋を見張っておりますと、竹内は土瓶を持って帰りましたが、三十分ほど過ぎると、人力車が来まして、竹内は行李とその土瓶を持って、その車に乗りました。車は品川の方をさしてずんずん走り、私は車のあとからついて走りました。
それから品川を過ぎ、大井町を通って大森の△△ま

で行きました。あまり遠かったのでずいぶん弱りましたが、ついに車は畑中の一軒家の西洋造りの家の前でとまり、竹内は行李と土瓶とを家(うち)の中に運び入れて車をかえしました。私はしばらくその家の様子を伺っていましたが、家の中には誰もいないように思われました。

近所で聞いてみると、誰もどんな人が住んでいるかは知らないけれど、夜分になると男が五六人集まってきては、西洋館の階下の隅にある室(へや)で、化学実験のようなことをするということでした。そこで私はとりあえず、品川署へ電話をかけて二人の角袖(かくそで)巡査にその家

の見張りをさせ、ひとまず帰ってきたのでございます」

「それはご苦労様。それじゃ、やっぱり夜分でないと、いかい、あげることはできないねえ、まあゆっくり休んでくれたまえ」

と小田さんは言いました。

波多野さんが出てゆくと、小田刑事は俊夫君に言いました。

「俊夫君、いま聞いてのとおりだから、今夜七時にここで勢揃いして、八時頃にむこうに着くことにするが、その間君たちはいったん帰って、また出直してきてくれるか、それとも少し長いけれど辛抱して待っていて

くれるか？」
　俊夫君が木村さんに都合を尋ねると、木村さんは、竹内から白金を取りかえすまでは、うちへ帰りたくはないと言いましたので、私たち三人は警視庁に止まって、六時間ばかり待ち合わせることにしました。
　待っているということは、ずいぶん骨の折れることです。こういうときに限って時計の針の動きがいつもより遅く思われます。やがて四時になったとき俊夫君はとつぜん私に向かって言いました。
「兄さん、僕これからちょっと用事があって出かけてくるから、おじさんの相手をしてあげてください。六

時までにはきっと帰ってくる」
こう言ったかと思うと、俊夫君は、呆気にとられた私たち二人を残して、つかつかと走りだしていきました。
退屈な時間もとうとう暮れて六時になりました。あたりは少し薄暗くなったかと思うと電灯がつきました。すると約束どおり、俊夫君がにこにこして私たちの室に入ってきました。
「兄さん、いまＰのおじさんに会ったら、今夜は兄さんに大いに活動してもらわねばならぬから、うんとご飯をつめこんで力を貯えておいてほしいと言ったよ」

私たちが食事をすますと、時計は七時を報じました。小田刑事は、数名の腕利きの刑事を先へ送って手配(てくば)りをさせ、私たち三人は小田刑事とともに、自動車に乗って後から出かけました。

大森へ着いたときは、あたりがもう真っ暗でした。畑中の西洋館の実験室らしい室(へや)には、七八人の男が寄り集まって、しきりに化学実験のようなことをやっていました。小田さんの命により、俊夫君と木村さんと私の三人が木陰に立って、実験室を覗(のぞ)くと、竹内もその中にいました。

間もなく竹内は得意そうな顔をして例の土瓶を取り

だしてきて親分らしい男に渡しました。親分は土瓶の蓋を取って、臭いをかぎましたが、たちまち色を変えて怒り顔になりました。彼はその土瓶を高く振りあげたかと思うと、中のお茶を竹内目がけてぱっとぶっかけました。……「あっ」と言ったのは竹内ではなくて木村さんでした。その声があまりに大きかったので、中の男たちは、一斉に私たちの方を向きました。

その瞬間、俊夫君は呼子（よびこ）笛を取りだして「ピー」と一声鳴らしました。すると実験室の電灯がさっと消えて家の外も中も、真っ暗闇に包まれてしまいました。

それから先、何事が起こったかは読者諸君の想像に

任せます。悪漢のうちのある者は家の中で、ある者は逃げだしたところを、はげしい格闘の後、張り込みの警官たちの手で捕縛されました。私も人々の間にまじって一臂（いちび）の力を揮（ふる）い一人の悪漢を捩（ね）じあげましたが、よく見るとそれは皮肉にも竹内だったのです。

約三十分の後、総計八人の悪漢は護送自動車の中に積みこまれました。小田刑事はうれしそうな顔をして、

「俊夫君どうも有り難う。この中には、警視庁で数年来行方を捜していた、稀代（きだい）の貴金属盗賊がいるよ。いずれゆっくりお礼にゆく。君たちは、あそこの自動車で帰ってくれたまえ」

と言いながら、護送自動車に乗って去りました。

木村さんは白金を溶かした「お茶」が流れてしまったので、あまり嬉しそうな顔はしていませんでした。

やがて俊夫君は木村さんを自動車のそばに引っ張っていって、

「さあ、木村のおじさん、約束どおり白金を取りかえしてあげました」

と言いながら、木村さんの手に白く光る塊を渡しました。

「やっ」

と言いながら木村さんは、つかむように受け取って、

「ど、どうしてこれが……」
「レントゲン検査に行ったのは、これを取りかえすためだったのです」
と、俊夫君は説明しました。
「ああしなければ竹内を連れだすことができません。僕は岡島先生の家から一足先に帰りおばさんに会って、朝飯を食うふりをして土瓶の中の本物をただのお茶にすりかえておいたのです。それから本物を別の罎(びん)にうつして、浅草の山本実験所へ持っていって還元してもらい、四時に警視庁から取りにいったんです。
先刻、盗賊の親分はあの土瓶にただただのお茶が入って

いたので、竹内がすりかえたものと思って、怒って投げつけたのですよ。……さあ早く帰って、おばさんを喜ばせてあげましょう」

底本：「小酒井不木探偵小説選　〔論創ミステリ叢書8〕」論創社
　　　2004（平成16）年7月25日初版第1刷発行
初出：「子供の科学　二巻三～五号」
1925（大正14）年3～5月号
入力：川山隆
校正：伊藤時也
2006年11月14日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、

校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。